

2026年 年頭にあたって

日本退職教職員協議会 会長 平岡良久



平岡良久

昨年10月21日、高市政権が発足しました。日本で初めての女性首相の誕生で喜ばしいことですが、最も望まない首相の出現でした。案に相違なく、所信表明で防衛費の対GDP比2%の前倒し、安保関連3文書の改定などに言及しています。

2025年の参議院選挙では、全国の仲間の奮闘があり、水岡俊一さんが見事当選を果たしました。同選挙では自民党への裏金・脱税批判により、2024年の衆議院選挙に続き自公政権は少数になりました。

高市首相は、裏金問題を克服できず、公明党に離反され、日本維新の会を政権に加えました。新たな政権は、「政治とカネ」改革課題、企業・団

体献金の扱いを先送りし、衆議院議員定数削減を政権合意文書に示すことで一致しました。

物価の上昇率は、2020年を100とするとは今は110を大幅にこえる物価高に見舞われています。1ドルが155円を超える円安のためもあり、年金生活者の生活はますます苦しくなっています。

また、軍事費予算の倍増、「年収の壁」を103万円から178万円に引き上げるための「財源確保」に社会保障制度の見直し、とりわけ高齢者の「医療費」負担の見直し（基本3割負担）が検討されようとしています。高市首相は、「台湾有事」に触れて、「存立危機事態」になり得るケースを述べていて、極めて不安定な発言をしています。安倍政権以降の「軍事偏重」「対米追従」路線の延長を許さず、平和で暮らしやすい国づくりをめざし、がんばりましょう。

コロナを越えて、50周年記念企画中国研修旅行開催される

―無謀な日中戦争・重慶空襲85年へ
(10月20日～24日)

ハイライトは

四川外国語大学での交流

参加者・望月信光

中国の人々の活気と街の賑わいに圧倒され、放しの4泊5日でしたが、とても楽しく、また刺激がいっぱいの記憶に残る旅となりました。これも添乗の沈雪軍さん、現地ガイド・成都の張小素さん、重慶の漆曉笛さん、そして、企画・コーディネートにご尽力いただいた尾崎明子さんのおかげと感謝。平岡会長もお疲れ様でした。持ち帰った感想や印象深い出来事は山ほどですが、いくつかピックアップ。まず三国志の英雄を祀った武侯祠での張さんの解説が、熱量と知識量でハンパ

じゃなかった。蜀の都だった成都に暮らす人たちが、どれほど三国志を愛し、誇りに思っているか、びしびしと伝わる語り口と内容でした。武侯祠は再訪ですが、さらりと回っただけの前回の薄めの印象は一変、ガイドの力はさすがだと思いました。そうそう、武侯祠見学を終えた後、



四川外国語大学絵の交流

入り口前で集合待ちをしていたら、直ぐ横で子連れの若夫婦が喧嘩を始めたのです。喧嘩といっても大声でなじりまくっているのは女性の方で、夫らしき男性はサンドバック状態。30分も続いていたでしょうか。わざわざ、こんな公衆の面前でやらずとも思ったのですが、帰国後、中国の知り合いにその話をしたら、自分の正しさを周囲に向かって声高にアピールするのは中国ではふつうにあることとか。そんなものかと妙に納得。

日本軍無差別爆撃の被害者に対し謝罪も補償もしていない国の人間としては、重慶を訪れることに、ちょっと臆するところもありましたが、それでも息を切らしながら坂と階段の街を堪能。極めつけは、市街地を見下ろす高台に築かれた蒋介石の司令部と居宅の跡(重慶抗戦遺跡博物館)です。そこも爆撃に遭い犠牲者も出たようですが、ここでの蒋介石の特権的な生活と、爆撃にほとんど無防備でさらされた重慶市民の戦時下の日常とは、ずいぶん距離があっただろうなど、急な階段を上り下りしながら考えたことでした。この距離感

は、国共内戦で国民党軍が敗走したことも関係がありそうな。まあ、「個人の感想」ですが。

そして今回の旅のハイライト、わたしたちには何といっても四川外国語大学での日本語を学ぶみなさんとの

交流です。応対していただいたのは、日本語学院・大学院生の岳俊吉さん。じつは、中国語の素養が皆無なうえ、交流のイメージがいまひとつ掴めずにいた身としては、いささか緊張気味に臨んだ場でしたが、それを察してか岳さんは、しっかりとした日本語を駆使した積極的な話題づくりで対話をリード。時に筆談も交えながら(やはり漢字は便利)互いの関心や近況のやりとりで交流は思いのほか盛り上がり、気がつけば「そろそろ終了」を告げる司会の方の声。とりわけ感心したのは、岳さんが将来の目標をきちんと見定め、その実現にむけた準備を着実に進めていること。行き当たりばったりで過ごした私の学生時代とは大違いです。



汗が噴き出す本場のマープー

重慶無差別爆撃被害者の証言

参加者・神奈川高シニア藤島政彦

コロナ禍で中断し、昨年は催行人員に達せず実現出来なかった東アジア研修旅行、6年ぶりの実施で心待

ちにして参加しました。盛り沢山の訪問箇所から、メインの重慶での爆撃被害者の証言の聞き取りの部分の感想を書くことにします。尚、今回事前に「日中戦争前史 上下」「重慶爆撃とは何だったのか」(共に高文研刊)を再読して臨みました。後者は残念ながら品切れ状態ですが、重慶爆撃訴訟の経過や被害者の証言も出ていてとても参考になりました。

4日目4人の爆撃被害者にお越しいただき証言を聞きました。最後に証言された女性は爆撃で両親が殺され、本人も頭部に弾片が残り後遺症に今でも悩まされている方でした。女性は過去の辛い体験をからか証言の途中気持ちが高ぶり、通訳がしにくい状態になりました。ただそう

なつたのは我々が非戦と日中交流の意思を持った集団であって、かつてここ重慶で無辜の民を殺戮し、その罪の償いも謝罪もしないままできた日本(人)の顔をした集団であったことも遠因かもしれないと思いました。尚、今回証言された元重慶爆撃訴訟原告団長の栗さんは、11月沖縄に招かれ、証言集会の後読谷の彫刻家金城実さんの「重慶爆撃」のレリーフ作りに参加されその完成を見届けられました。私も2年前に金城さんのアトリエを訪問したことがあります。是非、来年10月予定されている渡嘉敷島の軍隊「慰安」婦追悼式参加の途中、再度訪問したいと思っ



望む重慶市街

日中共同声明を逸脱した高市総理の国会答弁以降、日中関係は陰悪化していますが、こういう状況だからこそ添乗頂いた沈さんの言葉、「普通の人と人との交流で憎しみや偏見を取り除く」ためにも東アジア研修旅行をできるだけ長く続けてほしいと思っています。今回ご一緒した皆さん、ありがとうございます。私も微力ながら歪んだ構造を変えていくために頑張りたいと思っています。

問題多い3号被保険者制度 –ジェンダー平等学習会開催される

(2025年11月27日)



四川外国語大学絵の交流

学習会にあたって、各ブロックからの意見交換

ージェンダー平等委員会
報告・都高退教 佐伯典子

最初に平岡日退教会長の挨拶の後、藤本事務局長より組織現況報告がありました。「現会員数は約3万7000人、60単会中女性会員は約1万4000人。女性会長は5名、事務局長は10名でした」とあり、アンケートをとる中であがった各県の様子や要望も報告されました。また、委員会からは昨年度の取り組み「第6次男女共同参画基本計画に対するパブリックコメント」「女性差別撤廃条約選択議定書の地方議会における『意見書』採択状況」、退職者連合で行った、内閣特命担当大臣への要請などが紹介されました。

全国からは7つのブロックで参加がありました。「ジェンダー平等学習会を毎年開いている。自分自身のジェンダーバイアスに気づかされる（北海道）」「毎年、毎月の学習会を行っている（沖縄）」「退職者連合の方針

にジェンダー平等が入ったのは大きい（兵庫）」という報告がありました。「個人的なことだが、パートナーと互いに『主人』『家内』というのはやめようと話し合ったが、親とのギャップが大きかった」との報告もありました。

学習会では、ジェンダーの視点から第3号被保険者問題が

講師 永瀬伸子

（大妻女子大学教授、お茶の水大学名誉教授）

報告・千葉高退教 長澤淑夫



講師の永瀬伸子さん

学習会では、講師の永瀬伸子さん（大妻女子大学教授・お茶の水

大学名誉教授）が、第3号被保険者制度の問題について話されました。この制度は、サラリーマンの妻が保険料を払わず、基礎年金を支給される仕組みです。性別の規定はありませんがこの制度の利用者は98%女性です。制度発足の1985年当時、大卒でも女性は結婚や第一子誕生を期に退職するものが多く、子育てが一段落ついた後、労働市場に戻る時にフルタイムで就労せず、パートとして働いてきました。これは長時間労働の夫が家事育児を分担せず、妻

がそれを担うことを前提とした働き方です。妻への年金支給条件は、年収を100万程度に抑え、夫の扶養となることです。つまり男性が働き、妻が低収入でいることを奨励する制度となっています。

有配偶女性は高い能力にもかかわらず、結局、時給が低いパートに就き、扶養に留まるよう就業時間を調整するため、低賃金となってきました。これがシングル非正規の賃金を低く抑える機能を持つとともに、他方、昨今政府が進めるパートの年金制度加入とも矛盾します。企業側でも社会保険料負担を避けるため、負担のない労働時間、年収で雇用する誘因ともなっています。もし女性が第2号となり働いたとしても遺族年金の

構造ゆえに第3号被保険者の場合ほとんど年金は変わりません。この先、人口減少が続き、労働力不足が深刻化する日本では、結婚、出産後も女性が正規職に就くことが求められてきますが、その障害が第3号被保険者制度です。

男女平等のため、第3号被保険者制度を廃止し、中年期雇用における正規雇用を進めることが肝要ですし、さらに少子化を止めるために、雇用者男女の生活時間の確保と子育て期の低収入を補う給付と社会保険料の免除がなされるべきです。

豊富なデータをグラフと表で示した説得力ある内容を、自身の経験と、時に笑いを誘うエピソードを交えて、2時間あまりの講演でした。

県民合意なく進む、

辺野古埋め立て

（第14次沖縄交流団報告・12月1日～2日）

辺野古新基地はいらない！

私たちは反対しつづける

報告・大分高退教 栗林裕之

やはり暑い沖縄

12月に入り、九州でも朝晩はストーブを点け、ジャンパーを着ています。が、那覇空港に降りると周りは半袖、Tシャツ姿の人ばかり。気温25度、夏日。改めて南北に長い日本の地形

を実感しました。

学習会から始まる

一日目は早速、辺野古の学習会から始まりました。演題は「辺野古の軟弱地盤・海砂問題」。講師の奥間政則さんは建設工事を専門とする技術者で、これまでも海中に数十メートルの橋脚を打ち込んだことがあるプロフェッショナルの方。長い経験



学習会講師の奥間政則さん

を持つ技術屋だからこそ分かる
辺野古新基地建設の問題点をさまざまな角度から教えていただきました。現在

建設が進められている新基地の

海底は非常に地盤が弱いので、約7万1千本の杭を打ち込んで基礎を固める計画としているが、辺野古の海底は、かなりの傾斜（約18度）がある。そのため一番深いところでは堅い層に達するまでに90m以上もあり、非常な難工事である。さらに軟弱地盤が厚いため、震度2以下の地震でも多くの工区が崩壊する可能性が高い。また、砂で作った杭を使用するために膨大な量の海砂を採取しなければならず、海岸浸食をはじめ採取時の高濃度の濁り水の発生など海中の環境破壊が進行している。2017年に工事がはじまりすでに8年が過ぎているが、杭の設置は予定の71,000本に対して僅か3,000本足らず。基礎の工事さえいつ終わるかも全く不明な状況とのこと。ドローンで撮った沢山の写真や海底状態のイラストなどを多用した私たち素人でも分かりやすい説明に、この新基地がいかに無意味で、莫大な無駄な予算（税金＝私たちのお金）が使われているかが分かり、改めて怒りがわいてきました。難工事であることに加え、

私たちの抗議行動もあり、工事は現在大幅に遅れています。私たちの運動がこの工事を阻止することにつながっている。粘り強く座り込み行動を続けて、国に新基地建設をあきらめさせなければならぬと痛感しました。

現地抗議行動と連帯

二日目は辺野古での抗議行動。沖縄高退教役員の方々の運転とガイド付き。お弁当とおやつまで、何から何まで準備していただいて本当にありがたい。沖縄県庁前から辺野古までは約60km。途中、嘉手納飛行場ゲート前の県道20号線、通称「ゲート通り」を案内していただいた。昔のコザ市、アメリカ兵相手の英語の看板の店が連なる通り、今でも戦後の沖縄の雰囲気が残っている。改めて沖縄の歴史と現状を感じさせられました。

那覇からバスで約1時間半。辺野古新基地反対テントに到着。すでに朝から仲間が集まり、それぞれの主張と怒りをマイクにぶつけている。「毎年参加して下さっている日退教の仲間の皆さんが到着されました」と歓迎を受けた。



辺野古ゲート前の座り込み

その後いよいよキャンプシユワブゲート前で抗議の座り込み行動へと移る。沖縄県警の屈強な警察官が居並ぶ前で座り込み。抗議のマイクで

叫び、シユプレヒコールを上げ、連帯の歌を歌い、太鼓を打ち鳴らす。私たちの座り込みのため中に入れず、



辺野古の闘いをする看板

どんどん長くなる資材搬入のトラックの列、「座り込みをやめてゲート前を開けてください」と県警のスピーカーが連呼する。それを無視して叫び、歌う。数回の警告の後、ついに強制排除。参加者は警察官二人三人がかりで抱えられて歩道に運ばれ「足から降ろしますよ」と声かけされる。あれ？意外と丁寧。沖縄高退教の方の説明によると、沖縄県警は沖縄県民なので手荒なことはしないとのこと。全員が移動させられた後ゲートが開きトラックが次々と資材を運び込む光景に、いたたまれない気持ちになる。でも、参加者の「私たちがこうやって抗議活動が続いているから一日三回しか運び込めないんです」「私たちは負けない。だって勝つまで反対しつづけるから」との話に「微力だが無力ではない」という言葉を思い出しました。

沖縄を身近に感じて

12月というのに熱中症に注意し、日焼けするほどの日差しの中、行動を終え那覇への帰路についた。抗議行動は2014年7月から今日で4167日目。改めて沖縄の方々に感謝と心から

の敬意を表したい。あつという間の二日間でしたが、沖縄県退教・高退教の皆様には本当にお世話になりました。おかげで沖縄を身近に感じ、全国の仲間と連帯を深めた意義ある貴重な時間になりました。ありがとうございました。

編集後記

参議院選挙における参政党の躍進、高市内閣の高支持率、これらは日本国憲法と非核三原則を守ることが当然という意識を共有化する我々世代には理解できない現象である。

1980年代中曽根内閣とともに広がった自由主義の流行が、理解できなかった記憶がある。その時、私が教えた高校生の世代の子供の世代が、現代の若い世代、Z世代である。

本年、非常勤講師として学校現場に行き、生徒・若い教職員のZ世代と触れ合う機会を多く持った。彼らは、中国、朝鮮が嫌いである。それに付随するかたちで共産主義も嫌いである。彼らは、「科学的に〇×は正しい」という言い方を嫌う。彼らの共有化する意識は参政党や高市首相に近いようである。ただ彼らも戦争を嫌っており、もちろん環境破壊は絶対に許せないようだ。このあたりで、我々は救いを求めていけそうである。